別編　上野原遺跡

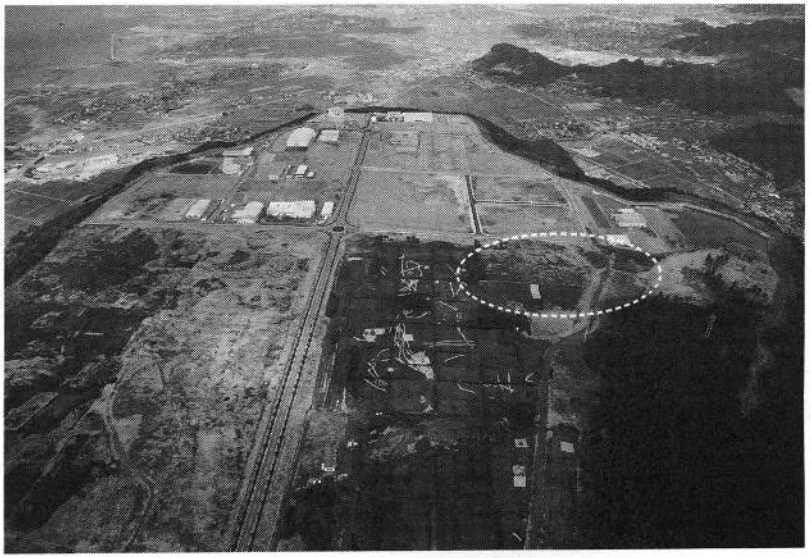


写真１　上空からみた上野原台地
点線内が上野原遺跡の縄文早期前葉の集落跡

写真２　上空からみた上野原遺跡の縄文早期前葉の集落跡

写真 3　竪穴住居跡の検出状態

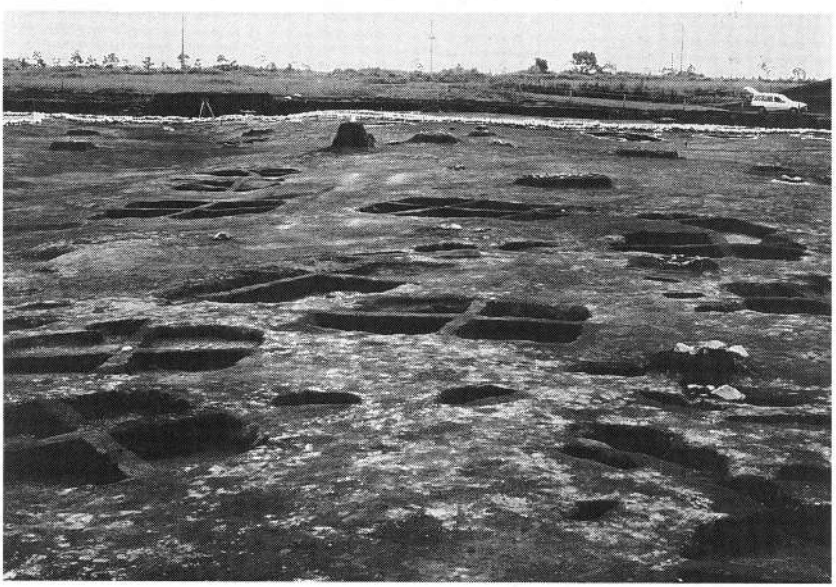


写真 4　集落跡全景

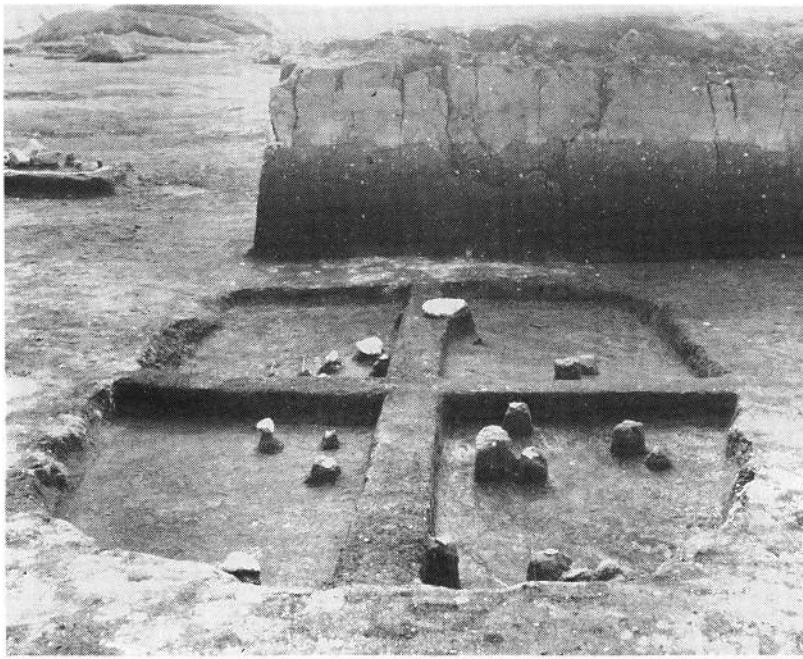


写真5　竪穴住居跡

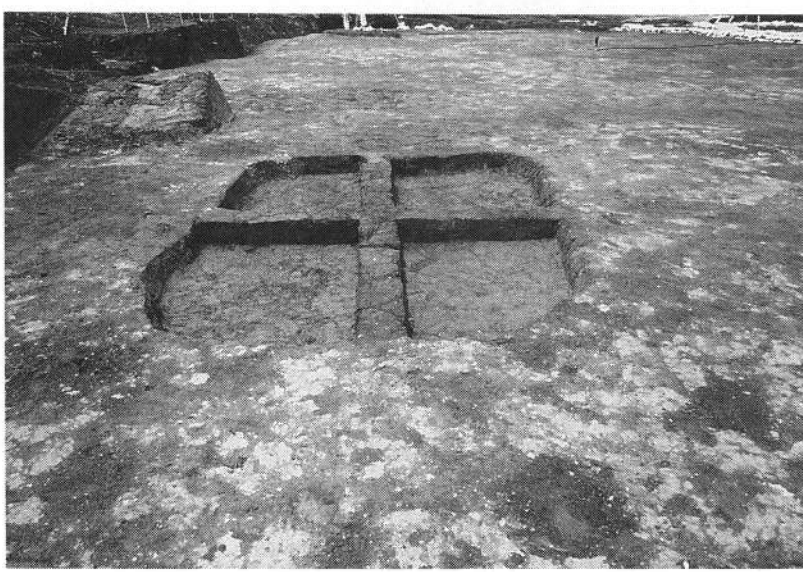


写真6　竪穴住居跡

写真8　連穴土坑

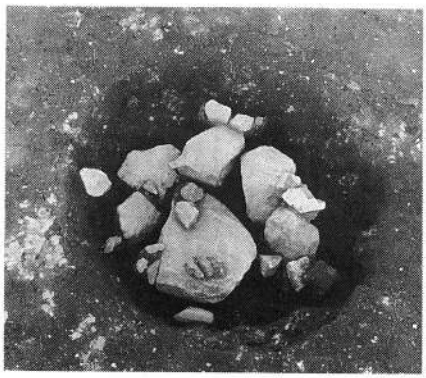


写真7　集石遺構

写真10　石器（石皿）出土状態

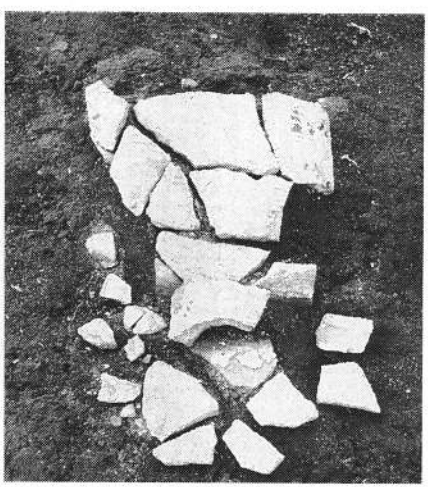


写真9　前平式土器出土状態

写真11　上野原遺跡出土土器（前平式土器）　9,500年前

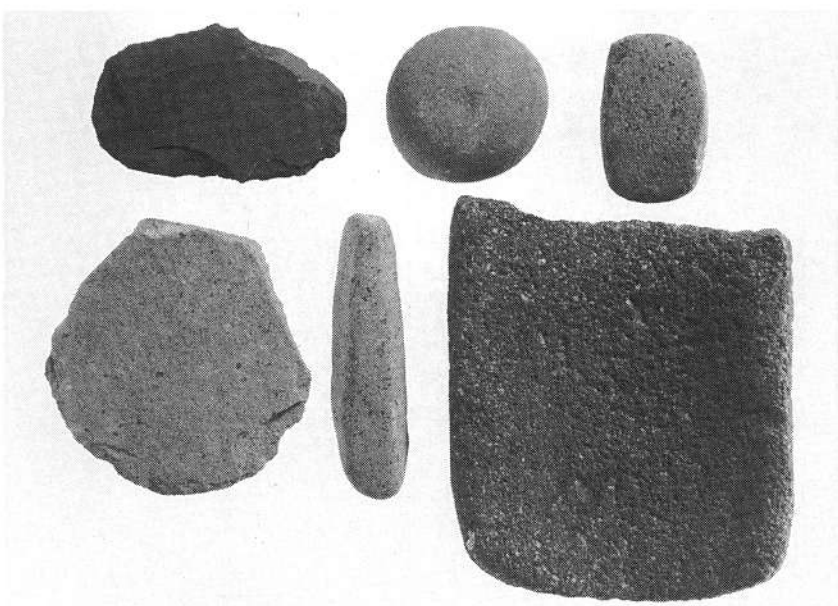


写真12　上野原遺跡出土石器（石皿・磨石・スクレィパーなど）　9,500年前

上野原遺跡（4工区）

一　はじめに

上野原遺跡は国分上野原テクノパーク建設にともなって、昭和六十一年（一九八六）に発見された縄文時代を中心とした大遺跡である。遺跡は、国分市街地の東南部に位置し、鹿児島湾奥部の姶良カルデラの火口壁に続く標高約二五〇㍍の台地上に立地する。

上野原遺跡の発掘調査は、昭和六十一年度から平成八年度にかけて鹿児島県教育委員会によって、継続的に実施された。この発掘調査によって上野原台地には、縄文時代早期を中心に、時代および文化のそれぞれ異なった特徴をもつ遺跡が存在することが判明した。

なお、鹿児島県教育委員会（鹿児島県立埋蔵文化財センター）から平成九年十一月、上野原遺跡（4工区）の中間概報が報告されたので、この概報をもとに本文は記述している。写真・図版は鹿児島県立埋蔵文化財センターの提供によるものである。

二　上野原遺跡の発掘調査

まず、昭和六十一年には、1工区の全面調査と4工区の確認調査が実施された。その結果、1工区では、弥生時代の中期末（約二〇〇〇年前）に該当する竪穴住居跡五軒と掘立柱建物跡二軒からなる弥生の集落跡が発見されている（第1図―第Ⅰエリア）。竪穴住居跡は、花弁形住居と呼ばれる南九州独特の形態のもので、在地性がひじょうに強い。この種の遺構をもつ弥生時代の集落跡は、隣接する4工区へ広がっていることが平成七年度の調査で判明した。

同じく4工区の確認調査では、縄文時代を中心とした第Ⅱエリアから第Ⅷエリアまで約六万平方㍍に及ぶ遺跡

第1図　上野原テクノパーク全体図と遺跡の位置

の範囲が確認された（第1図）。

平成三年以後は3工区の確認調査が実施され、縄文時代早期を中心とした約九万平方㍍に及ぶ遺跡の範囲が確認されている。

3工区の発掘調査は、平成四年度から平成六年度の三か年をかけて実施された。3工区では、歴史時代から縄文時代にいたる各時期の文化が発見されているが、遺跡の中心は縄文時代早期後半（約七五〇〇年前）の時期であり、遺跡のもつ文化内容は質・量ともにこの時期では群を抜いた高い評価を受けている。特に早期の遺構では、石蒸炉と考えられる集石遺構が二〇〇基以上も発見され注目された。さらに、これまで縄文時代には存在しないとされた壺形土器が、埋納された状態で多数発見された。なかでも土坑内に対で埋納された完形の壺形土器は、これまでの日本の縄文時代での発見例はなく、全国的に注目された。そのほか、土製や石製の耳飾、土偶、用途不明の土製品や石製品（異形石器）などの祭祀的な色彩の強い遺物が多数発見されている。日本列島の土製耳飾はこれまで縄文時代後期から晩期ころの代表的な文化遺物であったが、南九州ではそれよりも四〇〇〇年も早い早期に出現しており、このような南九州の縄文時代早期文化の早熟ぶりは、日本列島の縄文文化と比較して大いに注目されることになった。また、縄文時代後期には深さ二㍍にも達する狩猟用の陥穴が、約九〇基も整然と並んで発見されている。さらに弥生時代から古墳時代には竪穴住居や掘立柱建物などが多数検出され、この広い上野原台地は縄文時代だけでなく、古墳時代から弥生時代にも格好の生活の舞台になっていたことが明らかになった。

三　4工区の発掘調査

4工区は、平成七年度から八年度にかけて発掘調査が実施された。そして、遺跡は第Ⅱエリアから第Ⅷエリアに所在している（第1図）。なお、第Ⅱエリアの最下層からは縄文時代早期前葉の集落跡が発見され、日本列島では最古で最大級の定住化した集落跡として全国的な注目を集めた。そのため、第Ⅱエリアの成果の詳細については後述することにして、第Ⅲエリアから記述する。

第Ⅲエリアは4工区の西側に位置し、古墳時代（約一五〇〇年前）、弥生時代（約二〇〇〇年前）、縄文時代

（約二五〇〇年前と約七五〇〇年前）の複合遺跡が発見されている。古墳時代では、成川式土器期の竪穴住居跡が一軒発見されている。弥生時代では、棟持柱付掘立柱建物跡一軒のほか円形柵状遺構（四四基）などが発見されている。縄文時代晩期では、掘立柱建物跡一軒のほか、炭化したドングリが入った土坑（七基）なども発見されている。黒川式土器や打製石斧・石皿などの石器も出土しており、この時期の上野原台地での採集社会の様相をうかがうことができる。早期では一八基の集石遺構や平栫式土器・環状石斧などが出土している。

第Ⅳエリアと第Ⅴエリアは、弥生時代から縄文時代はほぼ重なり同一エリアの遺跡と考えられる。弥生時代では中期末に該当する柵跡や周溝状遺構二基（墓か？）、環状柵付掘立柱建物跡一軒などが発見されており、弥生時代の集落と畑作農耕とのかかわりが注目されている。縄文時代晩期には竪穴住居跡二軒や土坑七基などが発見されている。また、指宿式土器や市来式土器も断片的に出土しており、後期の段階にも近辺で生活が営まれたことが想定される。アカホヤ火山灰層直下の早期後葉（塞ノ神式土器）の層から集石遺構が三基、その下層の早期中葉（押型文土器など）からは二二基発見されており、この時期にはここを中心にした生活が営まれていたことがうかがえる。

第Ⅵエリアは、昭和六十一年に第Ⅰエリアとともに発掘調査が行われ、縄文時代の包含層等の調査が行われている。

四　第Ⅱエリアの発掘調査

第Ⅱエリアの発掘調査は、平成八年度に実施された。第Ⅱエリアは最北部の1工区寄りに位置し、近世から縄文時代早期前葉までの各時期の重複した複合遺跡が確認された。特に、最下層では縄文時代早期前葉の集落跡が発見され、日本列島で最古で最大級の定住化した集落として全国的な話題となった。

まず、第Ⅱエリアの遺跡の層位についてみてみたい。第1層は現代の耕作土で、層中には大正三年大爆発の灰白色の桜島火山灰（P-1と呼ぶ）も混入している。第2層は黒色の腐植土層で、近世から中世の遺物や遺構も発見される。第3層は黒茶褐色土層で、古墳時代や弥生時代の遺物や遺構が発見されている。第4層は薄えび茶

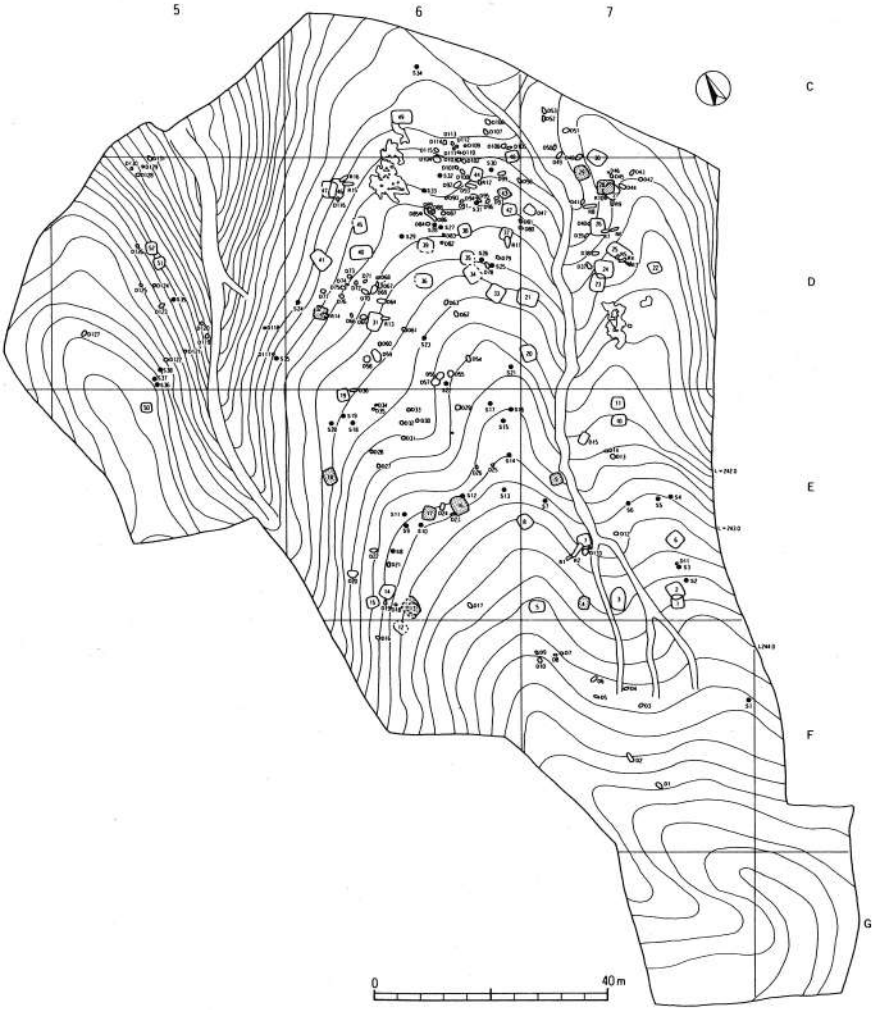
褐色土層で、桜島起源のP-5と呼ばれる火山灰を混入している。この層からは縄文時代晩期や後期の遺物が出土する。第5層は鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰層で明橙色を呈し、上層（a層）はアカホヤ火山灰層の二次堆積層で縄文時代前期の遺物が出土する。下層（b層）はアカホヤ火山灰層の一次堆積物で約六四〇〇年前の年代が与えられている。このアカホヤ火山灰層の下の第6層の灰茶褐色土層からは、早期後葉の遺構や遺物が出土している。第7層の黒褐色土層は早期中葉から前葉の遺構や遺物が出土する。第8層は白橙色軽石混じりの黒色土層で、約九五〇〇年前の桜島起源の火山灰（P-13）を含んでいる。特にこのP-13火山灰の発見は、発掘された集落の年代を決定する重要な役割を果たすことになった。第9層は暗茶褐色土層で、谷部にのみ堆積が確認されている。第10層は黄色火山灰土で、「薩摩火山灰」層と呼ばれている。桜島起源の重要な火山灰層（P-14）で、この火山灰噴出の爆発によって桜島は形成されている。第10層より下は第17層まで確認されているが、この上野原台地の第10層以下では生活痕が確認される文化層は存在していない。

まず、上層の第1層からは近世や中世の土師器（はじき）や陶磁器が出土し、当該期の溝や古道が発見されている。続いて第2層からは、弥生時代中期末の山ノ口式土器や宮崎県の中溝式土器などをともなう竪穴住居跡六軒が発見されている。竪穴住居群や畑畦や境界となる柵列や円形周溝など台地上に形成される弥生時代の集落と生産地の一端が検出されている。このように隣接する1工区から3工区にかけては弥生時代の大集落が形成されていたことが判明した。この上野原台地に展開する弥生時代中期末から後期初頭の弥生文化の発掘成果は、南九州の弥生時代の研究に大きく寄与するものである。

次の第3層の縄文時代晩期には、掘立柱建物跡一軒や炭化したドングリの入った土坑四基のほか多数の土坑が発見されている。そして後期の黒川式土器を中心に石皿や磨石や打製石斧など多数の石器も出土しており、晩期の生活はこの区域を中心としたことがうかがえる。

第4層には縄文時代後期の市来式土器が、第5層には前期の轟式（とどろき）土器や曽畑（そばた）式土器が出土しており、この時期にも継続的に生活が行われている。

アカホヤ火山灰層直下の第6層からは塞ノ神式土器や



▢	竪穴住居跡	52
●	集　石（S）	39
○	土　坑（D）	約260
⬠	（土　坑　群）	(約130)
⬭	連穴土坑（R）	16

（▒ P-13が中央部に堆積した竪穴住居跡）

第2図　縄文時代早期前葉遺構配置図（第IIエリア）

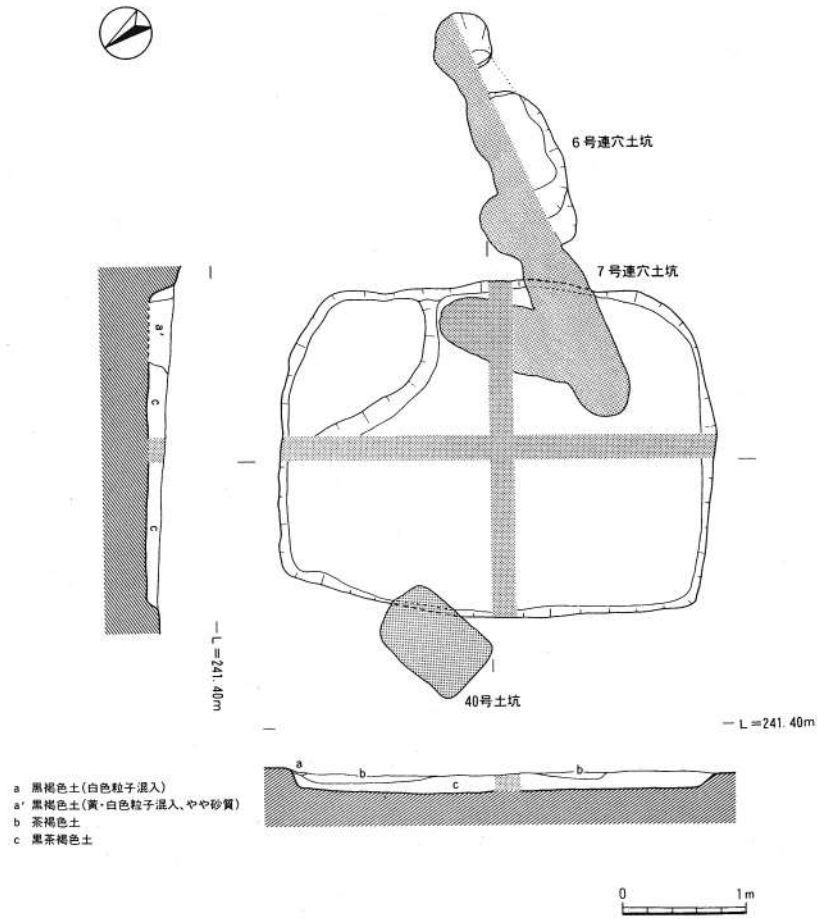
平栫式土器などの早期後葉の土器が出土するが、早期中葉から後葉の遺構や遺物は下層の第7層を主体に出土しており、生活の中心は第7層であったことが考えられる。第7層からは押型文土器や桑ノ丸式土器などの早期中葉から平栫式土器など後葉の土器や石器が出土し、それにともなって集石遺構五六基のほか土坑三基など多くの遺構が発見されている。さらに下層の第9層で確認される竪穴住居跡等にともなう早期前葉の土器が、この第7層からも出土している。そして下層の第9層から縄文時代早期前半の多数の竪穴住居や調理施設（集石・連穴土坑等）、道跡などが発見され、上野原台地は早期の前葉から生活の舞台が始まったことが判明した。

五　縄文時代早期前葉の最古・最大級の集落跡

第Ⅱエリアで発見された早期前葉の前平式土器期の集落跡は、竪穴住居五二軒、石蒸し調理施設の集石遺構三九基、燻製料理施設の連穴土坑一六基、土坑約二六〇基、道跡二条で構成される。これらの遺構はいずれも、約一万五〇〇年前の桜島起源の薩摩火山灰層（P-14）の上層から構築されている。なかでも五二軒の竪穴住居跡のうち一〇軒の竪穴内には約九五〇〇年前の桜島起源の火山灰（P-13）で埋まった状態で発見されており、少なくともこの火山灰の降灰以前に一〇軒の竪穴住居が存在していたことを示している（第2図）。また、この時期の土器は貝殻で刺突して施文した円筒形や角筒形の平底土器で、前平式土器と呼ばれる土器型式である。

1　竪穴住居跡（第3・4図）

第10層上面において五二軒の竪穴住居跡が発見された。住居跡は主として南北に延びる二条の谷状地形を呈した道跡の両側尾根部分に構築されている。住居跡の平面形は隅丸方形と長方形の二つのタイプがある。竪穴住居跡はいずれも竪穴内には柱穴は存在せず、柱穴は竪穴の周囲を取り囲む形で検出されている。竪穴の平面形の大きさは、約二×一・五メートルで面積約三平方メートルの最小のものから約四・四×三・五メートルで面積約一六平方メートルの最大のものまで存在するが、比較的大型の一〇平方メートル以上のものが一〇軒存在し、五平方メートルから一〇平方メートル以下のものは三四軒みられる。この規模が竪穴住居跡の一般的な大きさと考えられる。竪穴の深さは二〇センチメートルから三〇

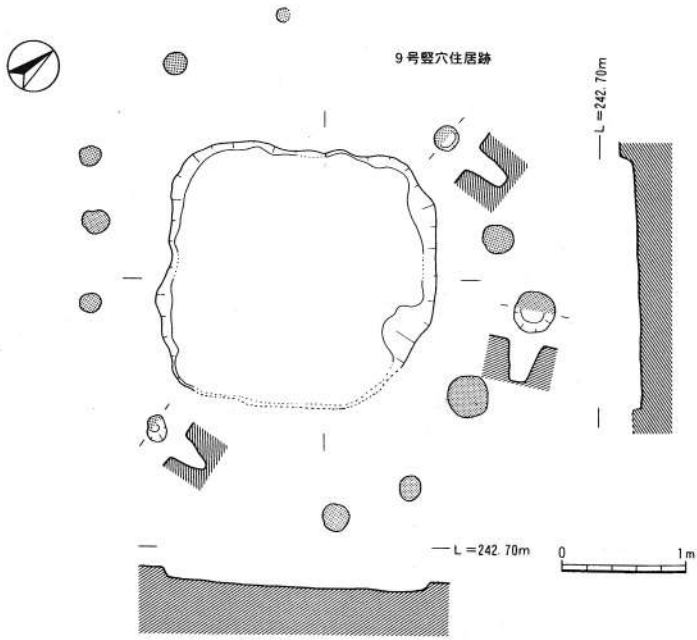


第3図　26号居住跡と連穴土坑

センチメートルを測る。

2　連穴土坑（第5・6図）

連穴土坑あるいは煙道付き炉穴と呼ばれるもので、南九州縄文時代草創期から早期前葉の時期にみられる特殊な遺構である。連穴土坑は並んだ大きな穴と小さな穴の床面がトンネル状に連なったもので、大きな穴の小さな穴寄りの床面や壁に焼土がみられる。そのため大きな穴は火を焚く穴（足場）であり、小さな穴は煙を出す穴である。小さな穴に肉や魚などをつり下げ、燻製をつくった施設と考えられている本遺跡では、一六基が発見されてい

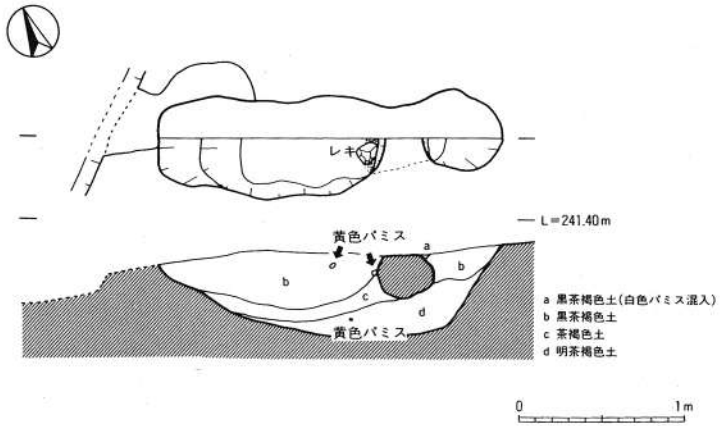


第4図　42・9号竪穴住居跡

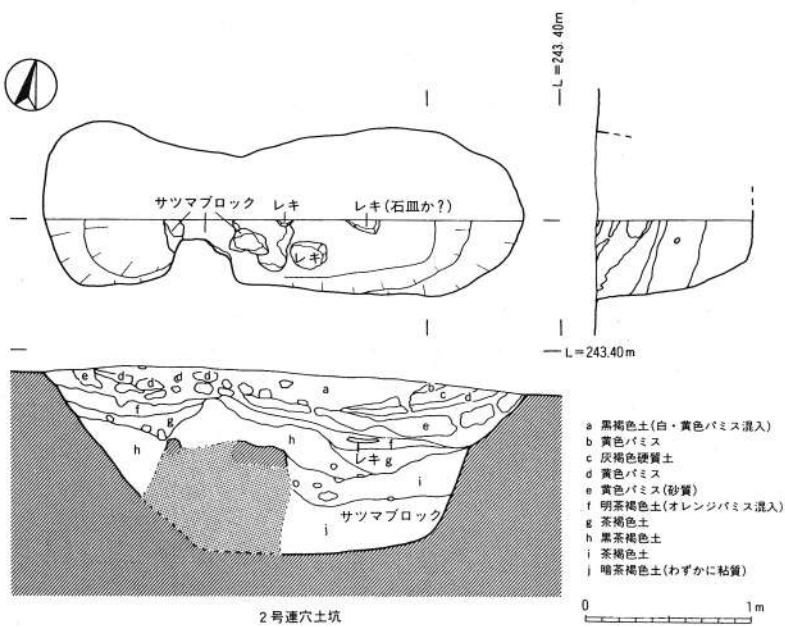
る。連穴土坑は単独で発見される場合もあるが、竪穴住居跡と切り合ったり、連穴土坑が延長上に重なって発見される場合が多い（第2図）。6号および7号の連穴土坑をみると、まず、7号が廃棄された26号竪穴住居跡の東壁面を利用して構築され、その後に7号のトンネル部分が崩落して使用不可能になった後、その延長上に6号連穴土坑が新たに構築されている。6号は長さ約二メートルで、幅約〇・六メートル、深さ約〇・五メートルの規模である。2号連穴土坑はP-13火山灰（桜島）に埋没したもので、火山灰降下直前に使用されたものであろう。そしてこの2号連穴土坑は7号竪穴住居跡を切って作られており、7号竪穴住居跡もP-13火山灰以前、つまり九五〇〇年以前に構築されたものであることが判明した。

3　集石遺構（第7図）

集石遺構は、総数三九基発見された。ほぼ全域の住居跡と住居跡の間の空間地帯に作られている。集石の礫（れき）の下に掘り込みがあるものとないものがある。掘り込みの径は約二メートル×一・五メートルの大型のものから〇・六メートル×〇・五メートルの小型のものがあるが、径一メートル前後の大きさが一般



第5図　6号連穴土坑

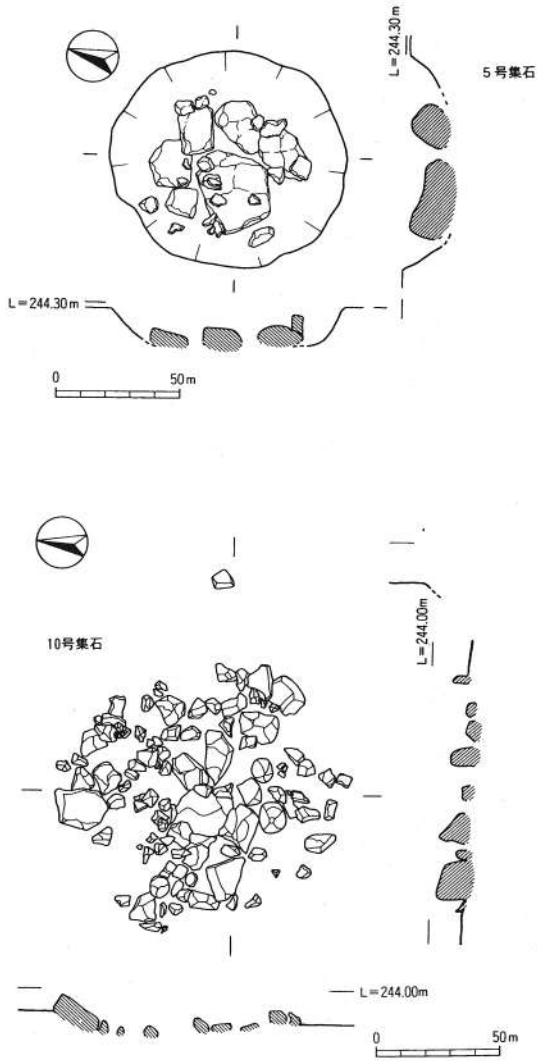


第6図　11・2号連穴土坑

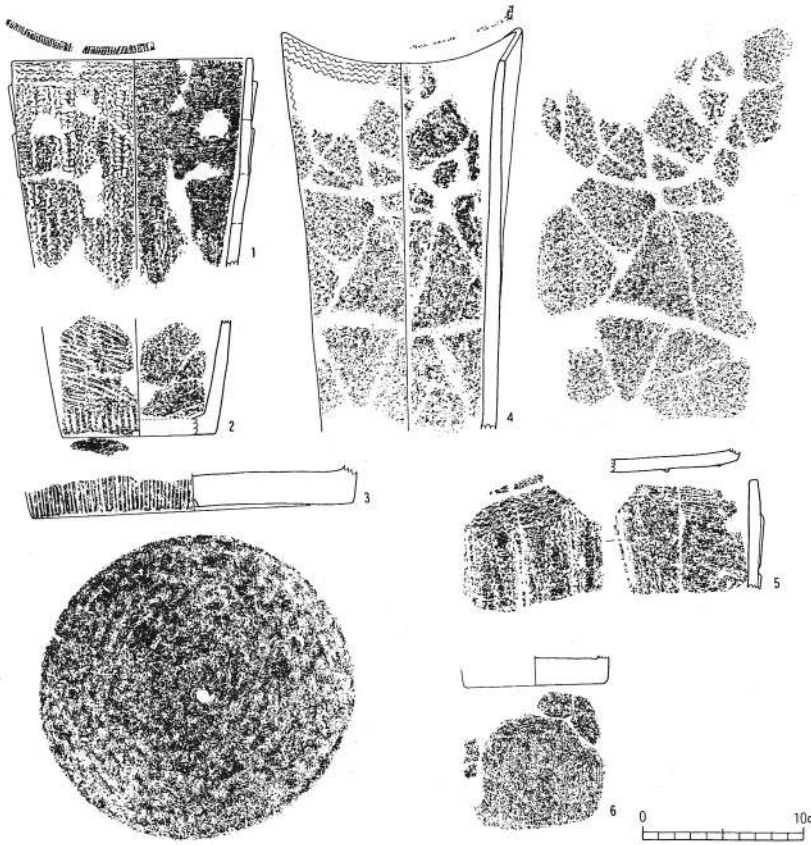
的である。また、礫の大きさや広がりの規模や量など様々であり、これは使用時の過程の違いによるところが大きい。礫は大半が安山岩の角礫や円礫の自然石を使用しているが、なかには石皿片や磨石（すりいし）・敲石（たたきいし）などの石器が混入した集石もある。これは使用不可能になった生活品の石器を集石の礫に混ぜて使用したものであろう。

4　土　坑

土坑は円形や長方形や長楕円形に掘られた小型の竪穴で、埋土は土壌のみである。そのため土坑の用途・性格は不明である。現在、埋土土壌の科学分析が試みられており、結果が判明すれば土坑の性格は得られよう。土坑は、総数約二六〇基の発見があるが、D-7区に約五〇基、C・D-6区に約八〇基の集中する箇所が存在する。このような在り方は墓の可能性も高い。



第7図　5・10号集石



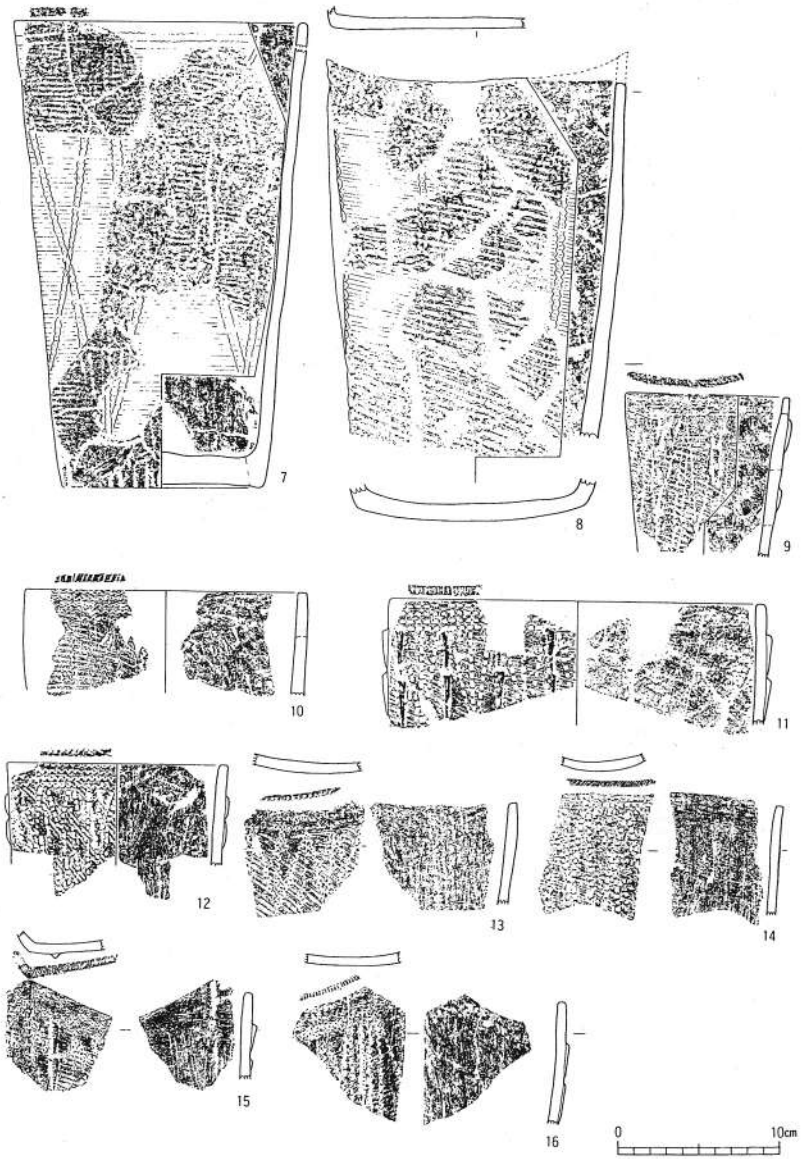
第８図　遺構内出土の土器（縄文時代早期前葉）

5　道　跡

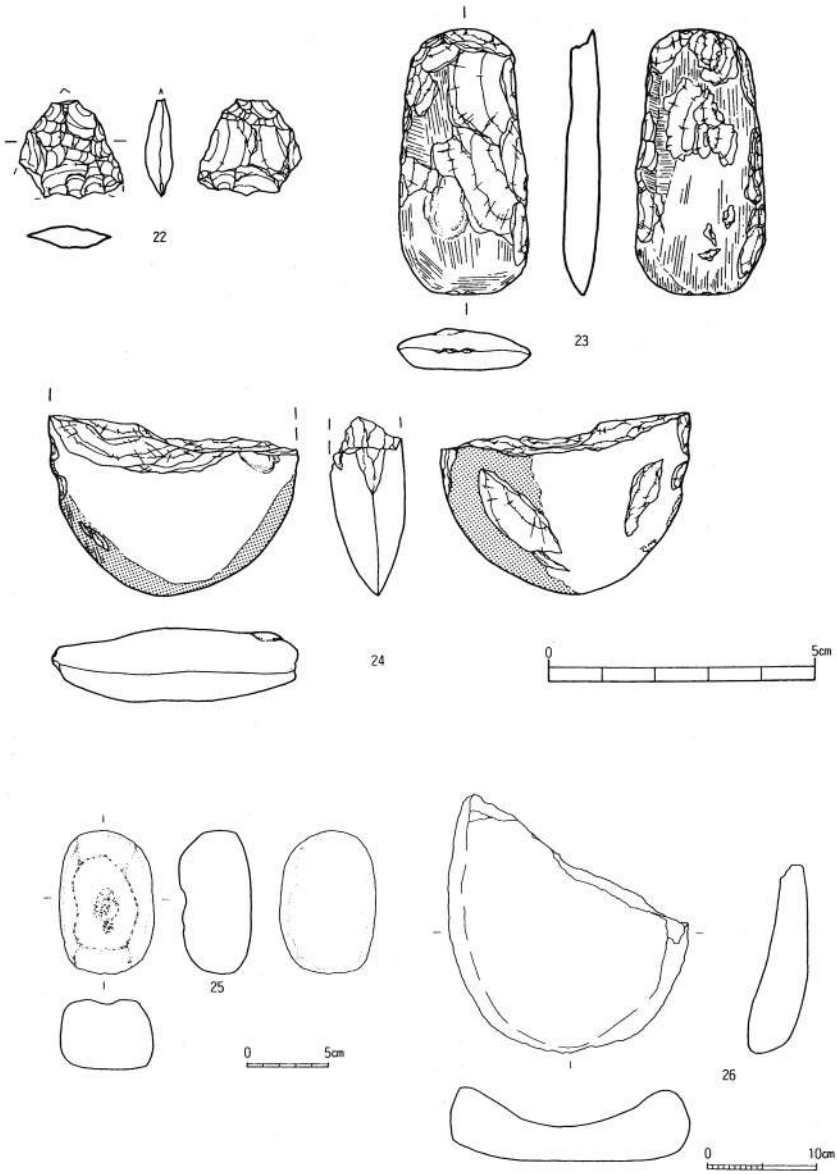
C～F-7区とC～E-5区の谷部に道跡が確認されている。この道跡は、自然の浅い谷を利用したもので、竪穴住居跡など他の遺構との重なりもみられない。遺構は排水の良好な微高地に構築されており、道跡は集落の道のほか排水路としての役目も果たしていたことが想定される。

6　出土遺物（第8～10図）

第Ⅱエリアの最下層から発見された集落にともなう出土遺物には土器や石器がある。土器は貝殻の施文具で刺突を施すタイプで、円筒土器と角筒土器の器形がある。円筒土器は土管状の筒形を呈し、底は平底である。角筒土器は四角い胴部の筒型で底部は同じく平底である。この土器は、鹿児島県本



第9図　縄文時代早期前葉の土器（7～9は第9層、10～16は第7層）



第10図　遺構内出土の石器

土を中心に宮崎県南部や熊本県南部（人吉盆地）の南九州の比較的狭い範囲に分布する前平式土器と呼ばれる特徴的な土器型式である。

石器は集落の遺構内からの出土は少ないが、包含層からは各種の器種が出土している。竪穴住居跡や集石遺構から出土したものには次のような器種がある。43号住居跡からは各先端部は欠損しているが、チャート製の石鏃（せきぞく）がある。24号住居跡からは頁岩（けつがん）の小型局部磨製石斧（せきふ）が出土している。同じく43号住居跡からは大型の頁岩製磨製石斧が出土している。34号集石内からは磨石（凹石）や破損した石皿が出土している。3号住居跡からも石皿が出土している。

このように、今から約一万年前から九〇〇〇年前の日本列島最南端の南九州に、一時期に十数軒で構成され数世代継続された縄文ムラが存立し、しかも独特で先進的な縄文文化が展開していたことが証明された。つまり上野原遺跡（4工区の第Ⅱエリア）は、日本列島では最古級で最大規模の定住化した集落として位置づけられたのである。